

# 国際センター通信

*Japan Society of Civil Engineers International Activities Center*

## 📖 国際センター通信とは？

土木学会の国際活動や技術交流に関する情報を集め、国内外の読者の皆さまにお届けしています。

- ・国際センターおよび海外支部（英国、韓国、台湾、トルコほか全 9 分会）の最新の取り組み
- ・ACECC（アジア土木学協会連合協議会）の活動状況
- ・31 の調査研究委員会による国際的な技術交流
- ・国内外で活躍する技術者・研究者の紹介
- ・注目のプロジェクトや最先端の土木技術のご紹介 など

**「今」の土木界を、わかりやすく・楽しくお伝えしていきます。**  
**ぜひ皆さまからのご感想やリクエストもお寄せください！**

## 🔗 今号（No.148）の注目記事

- 1) 会長年頭あいさつ
- 2) 留学生サポートチーム 現場見学会（JR 東日本 品川駅改良工事）
- 3) 地震工学委員会 ジョイントセミナー開催報告（カフラマンマラシュ地震＆能登半島地震）
- 4) FLF 委員がみた CECAR10（第 10 回アジア土木技術国際会議@済州島）
- 5) 2019 年度 STG 参加者 オマー氏による寄稿

今後も、皆さまにとって有益で、読みごたえのある内容をお届けしてまいります。

## 新年のご挨拶 ～国際連携を通じたカーボンニュートラルで レジリエントな社会の実現～



池内 幸司  
(土木学会第 113 代会長)

新年あけましておめでとうございます。

気候変動は、いまや人々の生活に深刻な影響を及ぼしています。昨年も世界各地で洪水、渇水、猛暑などが頻発し、カーボンニュートラルと防災・減災を両立させた国土・インフラの再構築は、国際社会共通の喫緊の課題となっています。

こうした認識のもと、「カーボンニュートラルでレジリエントな社会づくり」を会長プロジェクトとして立ち上げ、長期的かつ俯瞰的な視点から議論を進めてきました。カーボンニュートラルを環境政策にとどめるのではなく、エネルギー、国土利用、インフラを一体として捉え、将来像を具体化することが求められています。

2025 年 9 月の熊本での全国大会では、カーボンニュートラルを軸に据えた議論が多角的に行われました。地域の現場からエネルギー転換や人口減少への対応など、多様な実践例が紹介され、カーボンニュートラルに向けた取組が地域再生の原動力となり得ることが示されました。こうした現場に根ざした活動が、学会の議論を豊かにし、カーボンニュートラルの具体化を着実に後押ししていることを強く認識しました。

2025 年 10 月にシアトルで開催された米国土木学会の年次大会（ASCE 2025 Convention）では、協力協定の更新文書に署名するとともに、AI や機械学習、デジタルツインなど先端技術を活用したインフラ革新や、気候変動への適応に関する活発な議論に触れました。先端 IT 産業と学術が高度に融合する都市であるシアトルの特性を背景に、大学や専門家との連携も印象的で、技術・人材・社会課題を有機的に結び付ける姿勢は、日本の土木界にとっても多くの示唆を与えるものでした。

また、「人」に焦点を当てて土木の価値を伝える文化にも触れることができました。関わる人々の努力や思いを通して土木の意義を伝える姿勢に学ぶ点は多く、我が国においても、人の姿を通して土木の魅力を発信していくことの重要性を改めて認識しました。

さらに、2025 年 10 月に韓国・済州島で開催された第 10 回アジア土木技術国際会議（CECAR10）では、「Flood Risk Management Adapted to Climate Change」と題して全体講演を行い、日本の治水政策や流域治水の考え方をアジアの仲間と共有しました。講演後には多くの質問が寄せられ、日本への期待の大きさを実感するとともに、国際社会に向けた継続的な情報発信の重要性を改めて認識しました。

また、アジア土木学協会連合協議会（ACECC）の済州宣言（Jeju Declaration）に署名し、SDGs の達成、土木分野における気候変動対応と災害レジリエンスの主流化、貧困削減と包摂的（インクルーシブ）なインフラ整備といった価値を共有するアジアの連帯を確認しました。

本年も、カーボンニュートラルをはじめ、災害に強く持続可能な社会の実現に向けて、国内外の関係者の皆様と連携しながら、一步でも前進できるよう努力してまいります。

引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

## 現場見学会 JR 東日本 品川駅改良工事



アミールファルハン ビン ラザーリ  
(西松建設株式会社)

2025 年 11 月 13 日、日本在住の外国人留学生を対象に「JSCE 留学生向け現場見学会」が開催されました。本見学会は、JR 東日本の協力のもと、高輪ゲートウェイ駅から品川駅周辺にかけて進行中の先進的な都市土木プロジェクトを、約 2 時間にわたり集中的に学ぶ貴重な機会となりました。



見学会冒頭、プロジェクト概要の事前説明

埼玉大学、芝浦工業大学、横浜国立大学の学生をはじめ、計 10 か国から 14 名の参加者が一行となり、複数の主要インフラ開発現場を視察しました。

行程には、橋りょう建設工事、品川駅付近で進行中の環状 4 号線建設工事、そして京急八ツ山橋りょう再建工事で採用された鋼桁増分架設工法など、国内外から注目されるプロジェクトが含まれていました。



現場で施工状況の説明を受ける参加者

ツアーのハイライトは、参加学生と JR 東日本の技術者との活発な交流でした。参加者からは、建設手法や安全管理の考え方、技術者としてのキャリア形成など、多岐にわたる質問が寄せられ、現場ならではの会話が実現しました。

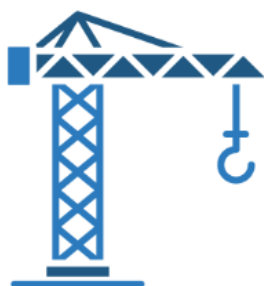
アンケートでは、「非常に教育的で有意義だった」「大規模な建設現場を間近に見られる貴重な体験だった」「新人技術者にとって素晴らしい取り組みだ」といった好意的な意見が多く寄せられました。

本イベントは、IAC 学生支援グループのメンバーである埼玉大学の党紀准教授、Ramboll Japan のカトリーナ・マエ・モンテス氏、そして筆者によって企画・運営されました。今回の見学会開催にあたり、多大なるご協力をいただいた JR 東日本ならびに土木学会国際センター（IAC）に、厚く御礼申し上げます。



留学生、JR 東日本の技術者および運営メンバー

.....  
【記：アミールファルハン ビン ラザーリ  
（西松建設株式会社）】  
.....



## ジョイントセミナー開催報告

### Lessons Learnt from 2023 カフラマンマラシュ 及び 2024 能登半島地震



小野祐輔  
地震工学委員会幹事長  
(鳥取大学)

土木学会学術交流基金による助成を受け、地震工学委員会とトルコ分会の共同で、ジョイントセミナー「Lessons Learnt From 2023 Earthquakes」を2025年11月14日・15日の2日間にわたり、トルコで開催しました。トルコ分会が関わるジョイントセミナーとしては通算5回目となり、開催にあたってはイスキュンデルン工科大学とトルコ技術者・建築家協会土木部門ハタイ支部にもご協力をいただきました。

日本からは庄司学氏（筑波大）、吉見雅行氏（産総研）、井上和真氏（立命館大）、加藤一紀氏（大林組）、小野祐輔氏（鳥取大）が参加しました。トルコ分会からは、前分会長の Zeki HASGÜR 氏（イスタンブール工科大学）と、現分会長の Beyza TAŞKIN 氏（イスタンブール工科大学）が参加しました。本セミナーは、2023年に発生したトルコ・カフラマンマラシュ地震と、2024年能登半島地震による社会基盤の被害から得られた知見を、両国の研究者間で共有することを目的としています。

初日はイスキュンデルン工科大学にて口頭発表を行い、2日目はトルコ技術者・建築家協会土木部門ハタイ支部の案内により、ハタイ県アンタキヤの現地視察を行いました。発表に先立ち、イスキュンデルン工科大学の Mehmet DURUEL 学長、Ahmet YAPICI 学部長、Mustafa DEMİRCİ 学科長、ならびにトルコ技術者・建築家協会土木部門ハタイ支部の İnal BÜYÜKAŞIK 支部長よりご挨拶をいただきました。

発表者と題目の一覧は表 1 に示す通りです。  
すべての発表終了後には、ステージ上で集合写真を撮影しました。



発表者

なお、大学側が事前に学生へ聴講を呼びかけてくださったこともあり、会場には 80 名を超える聴講者が集まりました。



イスケンデルン工科大学にて

翌日は早朝にイスケンデルン市内のホテルを出発し、ハタイ県アンタキヤに向かいました。日本側参加者と Beyza TAŞKIN 氏は、いずれも 2023 年の地震発生直後に現地調査を行った土木学会調査団のメンバーであり、今回は被災地の再訪となりました。

かつて多数の建物が倒壊し、がれきが山積みとなっていた市街地エリアでは、新しい建物の建設が進んでいました。



新しい建物の建設が進む市街地

一方で、旧市街エリアでは更地が目立つ中に損傷した建物を取り残されている場所もあり、エリアによる復興速度のコントラストが強く印象に残りました。



倒壊した家屋の瓦礫が残された旧市街

最後に、今後もトルコ分会と協力しながら、両国の地震工学研究における交流を継続していくことを約束し、今回のジョイントセミナーを締めくくりました。

.....  
【記：小野祐輔（鳥取大学）  
地震工学委員会幹事長】  
.....

口頭発表者一覧（発表順）

氏名	所属	題目
Masayuki YOSHIMI	National Institute of Advanced Industrial Science & Technology	Effect of the strong motion and ground uplifting during the 2024 Noto Peninsula earthquake
Ikki KATO	Obayashi Corporation	Damage cases and restoration responses of geotechnical structures in the 2024 Noto Peninsula earthquake
Fatih ÇELİK	Niğde Ömer Halisdemir University	Evaluation of the seismicity of the Iskenderun region and its effects on structural design in terms of soil-structure interaction within the scope of the February 6 Kahramanmaraş earthquakes
Kazuma INOUE	Ritsumeikan University	Reconnaissance report on bridge damage caused by the January 1st, 2024, Noto Peninsula earthquake, Japan
Gaku SHOJI	University of Tsukuba	Damage analysis of water supply and sewer pipelines in the 2024 Noto Peninsula earthquake
Osman ARIKAN	Istanbul Technical University	Quantity and characterization of debris generated in the February 6, 2023, Kahramanmaraş earthquakes
Yusuke ONO	Tottori University	Damage to transportation networks caused by the 2024 Noto Peninsula earthquake
Murat BİKÇE	İskenderun Technical University	Common causes of damage observed in reinforced-concrete structures in the February 6 earthquakes
Beyza TAŞKIN M. Hüseyin MASLAK	Istanbul Technical University	Ground motions during the February 6 earthquakes, current structural design practices and recommendations

## FLF 委員がみた CECAR10@済州島 ～10 回アジア土木技術国際会議 (CECAR10) 参加報告～



杉山 紗弥佳  
(東京大学大学院  
工学系研究科 社会基盤学専攻)



文山 草  
(株式会社 日立製作所 研究開発グループ)

今回、2025 年 10 月 21 日から 24 日にかけて、韓国・済州島で開催された、アジア土木学協力連合協議会 (ACECC) 主催の第 49 回理事会 (ECM / Executive Committee Meeting) と第 10 回アジア土木技術国際会議 (CECAR10) に、Future Leaders Forum (FLF) 委員として杉山・文山が参加しました。この通信では、その様子をご紹介します。まず、FLF や CECAR10 とは何かを簡単に説明します。

### ■ ACECC・FLF とは

ACECC は、アジア・太平洋地域の 17 の国/地域の土木学会によって構成された連合組織です。多国

間の連携をもとに、社会資本整備や土木技術に関する課題を協議する場が設けられており、半年に一度、理事会 (ECM) が開催されています。

FLF は、ACECC のもとで設置された若手技術者の交流の場で、各加盟学会から 25 歳以上 35 歳以下の代表が参加しています。半年に一度の ECM の際にも FLF メンバーによる発表の機会があり、今回の CECAR10 に合わせて FLF もセッションを開催しました。また、今回のセッション以外にも、FLF では毎月の Monthly Meeting や、Webinar Series などを開催しており、活発に活動しています。特に Webinar につきましては、各加盟学会から先進的な取り組みを進めている土木技術者をお招きしてセミナーを開催しておりますので、もし興味をお持ちいただけましたら、ぜひ次回の日本担当の会にご登壇いただけますと、とても嬉しいです。また、他学会が主催する Webinar についても、日本土木学会の会員の皆様には自由にご参加いただけますので、ぜひ積極的にご参加ください。



Future Leaders Forum にて

### ■ CECAR10 とは

CECAR10 とは、3 年に一度、ACECC 加盟各国・地域の土木技術者が専門分野を越えて一堂に集まる国際会議です。テーマも土質力学からデジタル技術まで多岐にわたり、参加者のバックグラウンドも、学生から企業の方まで、多様な方が参加されてきました。実際に参加してみて、CECAR10 は様々なテーマやバックグラウンドの参加者と一度に交流できる、

とてもユニークな機会だと実感しました。また、CECAR10 では、ACECC メンバーが主催する研究会である Technical Committee (TC) の発表も数多く行われました。TC についても、日本土木学会の会員様は自由にご参加いただけますので、ご興味がある方はぜひご参加ください。



Gala dinner のテーブルにて

### ■ FLF の活動

今回の FLF の活動のメインは、CECAR10 の期間中に開催されたセッションでした。

セッションでは FLF のメンバー含む 5 人の若手技術者が発表し、**ネパール**からは市民を巻き込んだ降雨量や地割れに関するデータ収集をもとにした研究、**オーストラリア**からは廃線をサイクリングロードとして転用する事例の成功例とその課題、**韓国**からは Synthetic Aperture Radar(SAR)を用いた観測のメカニズムとその活用事例、地下鉄からの緊急時脱出の人流シミュレーション、そして**モンゴル**における BIM 活用促進のためのロードマップの研究が発表されました。

このように各国の特色のあるトピックが紹介され、私たちも研究者・技術者として大いに刺激を受けました。

また、発表の前後には各国から持ち寄った恒例のお土産の交換や記念撮影が行われるなど、とてもアットホームなセッションで、若手世代の集まる和気あいあいとした雰囲気がありました。私達も日本から抹茶チョコレートをお渡しし、多くの方から好評をいただきました。

### ■ その他の活動

CECAR10 では FLF の活動の他にも、理事会やディナー等、たくさんのイベントがありました。

### ■ 第 49 回理事会 (ECM)

今回は学会に加えて、ACECC 各加盟学会の代表が、今後の活動方針を議論する会議である ECM にも参加しました。ECM ではときに白熱した議論となる場面もありましたが、それだけ各国が土木の将来を真剣に考え、議論しているという気迫を感じることができました。しかし、会議が終わったあとのディナーでは、先ほどは議論を交わしていた人々同士で楽しく語ったり記念撮影したりするなど、会議中の真剣さとは対照的に、国や立場を超えて笑顔で交流する姿が印象的でした。

### ■ 交流

CECAR10 の中日には Gala Dinner が行われ、学会参加者の皆様とともにディナーをいただきました。FLF メンバーも集まってテーブルにつき、和気あいあいとした雰囲気の中で交流を楽しみました。たくさん写真を撮ったり、それぞれの国の料理の話などをしたりと、仲を深めることができました。個人的には、南アジア系の方が優しい味のお料理に一面に胡椒をかけていらして、皆さん「spiciness を足したい」とおっしゃっていたのが面白くて、とても印象的でした。そのディナーの後も二次会としてホテルのバーで閉店まで研究や各国の土木事業の事情からペットの話まで幅広い話題で盛り上がり、非常に楽しい時間を過ごすことができました。

各国参加者たちと



## ■各委員の感想

今回は FLF メンバーの他にも、たくさんの学会参加者と交流することができました。韓国で働かれているイギリス人の方や、シンガポールで働かれているオーストラリア人の方など、アジア地域以外からいらしている方もいらっしゃり、アジア土木の国際化の勢いを肌で感じました。また、過去に日本の大手ゼネコンさんのサブコントラクターで働いていらした方や日本で英語を教えてください経験がある方にもお会いし、覚えていらっしゃる日本語で話しかけていただけてとても嬉しく思いました。

(杉山)

今回の CECAR10 は、私にとって初めて現地で参加する委員活動になりました。これまでずっとオンラインでのミーティングや交流を続けていたメンバーと、初めて対面で会えた瞬間はとても嬉しかったです。CECAR10 でセッションや食事を共にすることで、メンバーとのつながりがより強くなったと感じます。これまでは国際・多国間連携ときくと、その言葉からどこか硬い雰囲気を感じていましたが、今回 CECAR10 の参加を通し、結局それは人と人の温かく積極的な交流から生まれるものだ実感しました。(文山)



濟州島の海岸にて

.....  
【記：杉山 紗弥佳（東京大学大学院  
工学系研究科 社会基盤学専攻）  
文山 草（（株）日立製作所 研究開発グループ）】  
.....

## 博士課程への挑戦！

～スタディツアー奨学制度が未来を変えた～



オマー・ファルク・ハミン  
(2019 年度 STG 参加者  
バンガラデシュ工科大学/当時)

### \*スタディツアーグラント (Study Tour Grant: STG) とは？

海外若手技術者・研究者対象とする訪日研修プログラム。  
海外の土木人材に日本の最先端の土木技術やプロジェクト、さらに日本の文化に触れてもらい、グローバルな交流と相互理解促進を目的とする。

### ■概要

2019 年、私は光栄なことに、バンガラデシュ代表として土木学会（JSCE）のスタディツアーグラント（STG）の招聘者に選ばれました。当時、私はバンガラデシュ工科大学（BUET）で土木工学の理学士号を取得したばかりで、交通工学を研究対象として、土木工学の修士号取得を目指していました。スタディツアーグラントプログラムの招聘者に選ばれたことは、私の初期の学業への努力が認められただけでなく、私にとって大きな節目となりました。この経験は、博士課程への進学と研究職の追求という私の決断に大きな影響を与えました。

STG の選考プロセスそのものは、厳格かつ意義深いものでした。私はバンガラデシュ工学会から、BUET の他の 2 名の大学院生と共に推薦されました。詳細な質問票と添付書類を提出した後、私たちは不安な気持ちで最終決定を待ち続けました。私は、A.F.M. Saiful Amin 教授が、バンガラデシュ代表として私が

2019年度のSTG参加者に選ばれたことを知らせてくれた瞬間を今でも鮮明に覚えています。その知らせにより、学問的にも、職業的にも、そして個人的にも忘れることのできない旅が始まりました。

プログラムの一環として、私は学術アドバイザーの石坂哲宏教授とペアを組みました。教授からは、第21回インターナショナルサマーシンポジウムでの発表に向けた研究論文の準備において、貴重なご指導をいただきました。研究論文のタイトルは、「Salehpur 橋でのバス事故調査への AcciMap 手法の適用」で、私にとって国際シンポジウムで初めて自分の論文を発表する機会となりました。様々な国から集まった研究者や専門家を前に、自分のメソドロジー 手法を説明し質問に答えることは、非常に励みになりました。

研究発表後の議論を通じて、私は若手研究者としての自信を深めると同時に、交通安全やシステム分析における自分の研究は、幅広い議論の中でも成り立つ、役立つことを再確認しました。このシンポジウムでの教授陣とのやり取りは、交通工学の博士号取得を目指すという私の決意を確固とさせました。特にマレーシアの教授から博士課程への進学を勧められたことはきっかけの一つとなりました。

シンポジウムの他にも、STG プログラムは日本の土木技術の活用や研究文化に深く触れる機会を提供してくれました。最初の時期の技術視察の一つとして、鹿島技術研究所を訪問しました。そこで大規模構造試験実験室、風洞施設、地震研究用の三次元大型振動台など、先進的な実験施設を視察しました。先進的な研究基盤が、いかに建造物の安全性やレジリエンスにおける革新を支えているかを目の当たりにし、とても刺激を受けました。

このような大規模施設へのアクセスが限られた環境で育った私にとって、今回の訪問は、研究への継続的な投資と産学連携によって何が可能になるかイメージする助けとなりました。

羽田国際空港のトンネル建設プロジェクトも視察しました。そこで私たちは、密集した都市環境での地下インフラの建設に関する技術的な課題について、技術者から説明を受けました。建設中のトンネルを歩き、プロジェクトの技術者と直接話すことで、理論的な知識を実装に結びつけることができました。この経験を通じて、交通インフラにおけるシステムレベルの思考に対す

る私の理解を深めることができました。この思考は、後に私の博士研究の中心的な視点となりました。

STG プログラムでは、土木技術者の社会・環境への責任の重要性も強調していました。産業廃棄物の不法投棄現場である豊島（香川県）を訪問し、強い衝撃を受けました。無責任な行為によって長い間、環境への影響に改善措置や制度改正にて対応したということは私の記憶に長く残りました。技術者の倫理感、説明責任、持続可能性、および社会的信頼の重要性をしっかりと理解できました。



参加者たちと

このプログラムから強い影響を受けたもう一点は、災害時のレジリエンスと復興でした。広島県呉市坂町、そして御笠川沿いの被災地を視察し、日本が自然災害にどのように体系的かつ効率的に対応しているのかを目の当たりにしました。堆積物の管理、緊急輸送の復旧、仮設住宅の建設、河岸の保護計画について学びました。自然災害が頻発する、河川を多く持つ国から来た者には、この訪問は特に意味深く、強靱なインフラがどのように人命を救い、暮らしを守り、長期的な開発を支えることができるのかについて、理解を深めることができました。

桜川ダム、来島海峡大橋、明石海峡大橋といった大規模なインフラプロジェクトを視察して、日本の土木工学の規模とそこにかかる情熱を強く感じました。これらの構造物は、いかに優れた技術、安全性、審美性、および社会的ニーズを併せ持つように設計されているかを示していました。交通工学を専門とする者として、山陽新幹線に初めて乗車した際には同様に興奮しました。日本の高速鉄道システムを実際に体験して、入念な計画に基づく公共交通システムの効率性

と信頼性をはっきりと理解しました。この体験は後に、米国のような自動車に依存した環境における交通課題に対する私の見方に影響を与えました。

さまざまな国から集まった STG の参加メンバーとの交流も、私の眼を開かせるものでした。議論、食事を共にする、および視察を通じて、国際的な知識交流とピアラーニングの価値を実感しました。彼らとの交流を通じて、地域によって技術的な課題は異なるものの、効果的な解決策を開発するには協力と学びの共有が不可欠であるとわかりました。このつながりは、STG を超えて広がり、長く仕事上でのつながりへと発展しました。

STG プログラム修了後、私は土木工学の博士号取得を目指し、米国パデュー大学に入学し、全額奨学金付きの入学が認められました。コロナウイルスの世界的流行やビザ発給の一時停止により、2021 年春まで入学が延期されましたが、STG での経験に端を発した私の意欲が削がれることはありませんでした。その間も私は SNS を通じて STG の仲間たちと連絡を取り続け、進学や将来の目標について話し合いました。

2021 年の秋、パデュー大学 Lyles School of Civil and Construction Engineering で、2019 年度の STG 参加者の一人であるモンゴル出身の Munkhsaikhan Battumur さんと思いがけず再会しました。今度はアメリカで、お互い大学院生として再会するという、非常に印象深いものとなりました。さらに、私のこれまでの歩みが彼の大学院進学への動機となり、STG プログラム期間中に話していた大学院入学試験（GRE）や英語試験（IELTS など）準備が彼の進学を決断させたこと知り、胸が熱くなりました。

この経験を通じて、私は学問の世界にとどまりたいという思いを再確認しました。学問の世界では、良き指導者との出会いと知識の共有が次世代のエンジニア育成を可能にします。STG プログラムで得た学びは、博士課程在学中も、私の研究の指針となりました。私の研究は、交通システム、エネルギーインフラ、およびレジリエンス計画を統合し、最終的には電気自動

車向けの効率的かつ強靱なインフラに焦点を当てたものでした。日本で目にした災害への備え、システムの信頼度、およびソーシャルインパクトに重点を置くことが、私の研究の基本理念となりました。

博士号を取得した今、これまで辿ってきた学問の道が、土木学会の STG プログラムによって方向付けられてきたかよく思い出します。このプログラムは、私に土木のプロジェクトを教えてくれるだけではありませんでした。私の世界観を広げ、研究者としての自信を高め、さらに土木技術者の国際的なコミュニティへとつなげてくれました。私の強い想いを具体的なものに変えました：優れた技術を追うだけでなく、社会のレジリエンスや国を超えて連携することを生涯の仕事とするというイメージができました。

若手の土木技術者にこのような機会を提供してくれた土木学会には今でも深く感謝しています。STG プログラムは、私が博士課程への進学を決心する決定打となり、今でも私の技術者・研究者としての価値観に影響し続けています。今後も土木学会と協働、情報共有や交換を通して、繋がりたいと思います。そして、これからも多くの若手技術者が、この素晴らしいプログラムから多くの学びをえるよう願っています。



.....  
【記：オマー・ファルク・ハミン  
（バングラデシュ工科大学 大学院）】  
.....

## ■ 国際・委員会ニュース

### ◆ R8 年度 学術交流基金助成申請 受付開始

詳細 ▶ : <https://committees.jsce.or.jp/iefund/>

### ◆ R7 年度スタディーツアーグラント参加レポート

詳細 ▶ : <https://www.jsce-int.org/event/study>

\* モンゴル、ミャンマー、トルコ、バングラデシュ

### ◆ R6 年度土木学会国際貢献賞、国際活動奨励賞 授賞者インタビュー

詳細 ▶ : [https://committees.jsce.or.jp/kokusai/interview\\_FY2024](https://committees.jsce.or.jp/kokusai/interview_FY2024)

### ◆ R7 年度土木学会国際貢献賞、国際活動奨励賞候補者 推薦募集

詳細 ▶ : [https://committees.jsce.or.jp/kouken\\_sho/node/34](https://committees.jsce.or.jp/kouken_sho/node/34)

### ◆ コンクリート委員会 “Concrete Committee Newsletter No.75”

詳細 ▶ : <https://www.jsce.or.jp/committee/concrete/e/newsletter/newsletter75/index.html>

### ◆ IABSE ニュースレター Newsletter October 2025

詳細 ▶ : <https://mailwizz.mail-iabse.org/index.php/campaigns/so072ansloc6f/track-url/ce7732y72le76/899ae31e577f32c15c13503103c711f7e522ed5c>

### ◆ ECCE 81st General Meeting Press Release

詳細 ▶ : [https://www.dropbox.com/scl/fi/1b3kgm20120zkt5mrcv8w/ECCE\\_Press\\_Release\\_20251021\\_81-ECCE-GM.pdf?rlkey=njodsejul95r6619yqeqlul6h&st=khis3fb9&dl=0](https://www.dropbox.com/scl/fi/1b3kgm20120zkt5mrcv8w/ECCE_Press_Release_20251021_81-ECCE-GM.pdf?rlkey=njodsejul95r6619yqeqlul6h&st=khis3fb9&dl=0)

### ◆ 国際センター通信 No.147

▶ 日本語 : [https://committees.jsce.or.jp/kokusai/iac\\_news\\_2025\\_10](https://committees.jsce.or.jp/kokusai/iac_news_2025_10)

▶ 英語 : <https://www.jsce-int.org/pub/iacnews/147>

## ■ イベント、セミナー情報、案内等

### ◆「第 1 回土木技術のグローバル化セミナー :「アジアにおける土木技術者ネットワークの形成と日本の役割」

- ・日時 : 2026 年 2 月 12 日 (木) 14:00~17:00
- ・会場 : 土木会館 2Fl., 講堂
- ・詳細 ▶ <https://committees.jsce.or.jp/kokusai12/>

### ◆ 予告「第 2 土木技術のグローバル化セミナー:「地域開発における多国間協力」

- ・日時 : 2026 年 4 月 21 日 (火) 14:00~17:00
- ・会場 : 土木会館 2Fl., 講堂、
- ・詳細 ▶ 今後 HP にてご案内いたします。

### ◆ 地域・インフラづくりの未来 -ノルウェーの透明な社会から学ぶ- (「ノルウェー、透明な世界の地域・インフラづくり-日本の未来を展望する-」発刊記念シンポジウム)

- ・日時 : 2026 年 2 月 4 日 (水) 第一部 10:00~12:00, 第二部 13:00~15:00
- ・会場 : 土木会館 2Fl., 講堂
- ・ハイブリッド形式 (ZOOM ウェビナー)
- ・詳細 ▶ <https://committees.jsce.or.jp/kikaku05/node/18>

### ◆ IABSE Newsletter January 2026

- 詳細 ▶ <https://mailwizz.mail-iabse.org/index.php/campaigns/vm1182xnd2f2a/trackurl/ce7732y72le76/f30eee4367c8c773347ef316fb0694feb0965dba>

### ◆ 7<sup>th</sup> fib Congress

- ・日時 : 2026 年 6 月 15-19 日
- ・会場 : Culturgest (<https://maps.app.goo.gl/9dpnAebrmcjwNihY9>)
- ・詳細 ▶ <https://fiblisbon2026.pt/>

### ◆ IEEE International Conference on Electrical, Computer and Energy Technologies (ICECT 2026)

- ・日時 : 2026 年 6 月 11-13 日
- ・会場 : TBA (福岡県 福岡市)
- ・詳細 ▶ <https://www.iceccme.com/2026>

## お知らせ

### ■ 投稿・寄稿の募集

本誌では、皆さまからの活動報告やコラム、研究紹介などのご寄稿を随時受け付けております。  
分量等は問いませんので、お気軽に**土木学会事務局**までご連絡ください。

~~~~~  
・【送付先・問い合わせ】（公社）土木学会 国際センター：iad@jsce.or.jp  
~~~~~

### ■ 読者アンケート・ご意見募集

紙面へのご感想やご意見をお寄せいただけますと幸いです。

~~~~~  
アンケートフォームはこちら▶ <https://forms.gle/3AVxpF8nPBK27Xpv8>  
~~~~~

## 配信申込み

「国際センター通信」の配信申込みを受け付けております。  
お申し込みいただくと、新号発行時にご登録のメールアドレスへ直接お届けします。

【申し込みフォーム】

◆日本語版: <http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>

◆英語版: <http://www.jsce-int.org/node/150>

## SNS・Web 情報

直近の国際センターの活動を紹介しています。

◆【土木学会 Web サイト（英語）】 <https://www.jsce-int.org/>

◆【土木学会 Web サイト（日本語）】 <https://www.jsce.or.jp/>

◆【国際センターWeb サイト】 <https://committees.jsce.or.jp/kokusai/>

◆【Facebook】 [https://www.facebook.com/JSCE.en/?locale=ja\\_JP](https://www.facebook.com/JSCE.en/?locale=ja_JP)

◆【YouTube】

[https://youtube.com/channel/UCGI56DHzX\\_cGDmHUrRlKA?feature=shared](https://youtube.com/channel/UCGI56DHzX_cGDmHUrRlKA?feature=shared)